令和８年１１月号

こちら危機管理課お天気相談所

～気象防災アドバイザーによるすぐに役立つ気象情報を月１で配信～

※気象防災アドバイザーとは「地元の気象に精通し、地方公共団体の防災対応を支援することができる人材」として国土交通大臣が委嘱した方です。



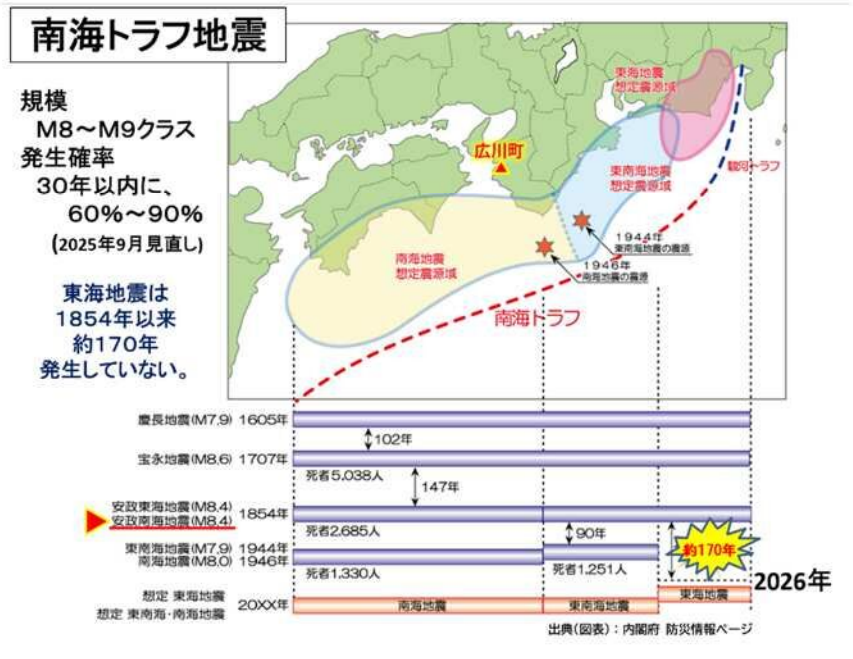
「稲むらの火」に学ぶ？

2011 年の東日本大震災では、東北地方の太平洋沿岸を襲った津波によって多くの人命が失われました。これを受けて、津波から国民の生命を守ることを目的に「津波対策の推進に関する法律」が制定され、その中で毎年 11 月 5 日が「津波防災の日」と決められました。また、2015 年に国連総会で制定された「世界津波の日」でもあります。津波による被害を減らすため、世界中で防災意識の向上に取り組む日となっています。

「津波防災の日」および「世界津波の日」の由来となったのが、1854 年 12 月 24 日（旧暦 11 月 5 日）に発生した安政南海地震（M8.4）（下図参照）です。 大きな揺れの後、津波が押し寄せましたが、現在の和歌山県広川町では濱口梧陵が稲むらに火を放ち、多くの村人を高台へ避難させた「稲むらの火」の逸話に由来しています。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が「稲むらの火」の逸話をもとに「A Living God」を書いたことから、昭和 12（1937）年から約 10 年間、国定教科書『小学国語読本』にも「稲むらの火」として掲載され、多くの子どもたちに津波から命を守る教訓を伝えました。「稲むらの火」のあらすじは次のとおりです。



1854 年 11 月 5 日、安政南海地震が発生し、現在の和歌山県広川町周辺は大津波の危険にさらされました。大きな揺れの後、村人たちが不安の中にいるなかで、醤油醸造業を営んでいた濱口梧陵は、繰り返し伝えられてきた津波の経験から、間もなく巨大な津波の襲来を察知しました。しかし、日は暮れ、高台に避難を急がせることは容易ではありませんでした。そこで梧陵は、自らの大切な財産である収穫後の稲むらに火を放ちました。村人たちは驚いて火の手が上がる山へ駆け上がり、その明かりを頼りに高台に避難しました。まもなく海から巨大な津波が押し寄せ、村は大きな被害を受けましたが、多くの人々の命が救われました。



この出来事は「稲むらの火」として語り継がれ、地震の後には津波が来ること、異変を感じたらためらわずに高い場所へ避難することの大切さを伝える物語となりました。

津波というと東北や太平洋沿岸の出来事と思われがちですが、2011 年の東日本大震災では東京湾内にも津波が伝わりました。東京港でも潮位の大きな変動が観測され、津波は決して遠い地域だけの災害ではないことを示しました。

南海トラフ巨大地震の被害想定では、葛飾区の最大震度は５強とされ、東京湾北部の津波の高さは約２メートル、葛飾区は海に面していないため、東京湾沿岸のような直接的な津波浸水は想定されていません。ただ、津波は河川をさかのぼる性質があるため、東京湾から離れた地域でも決して安心はできません。荒川・中川・江戸川の川沿いでは注意が必要です。“東京湾内湾”に大津波警報や津波警報が発表された際には、中川のテラスや江戸川の河川敷などには近づかないようお願いします。津波の様子を見に行くことは大変危険です。幸いなことに、南海トラフ地震による津波が東京湾内に入り、東京湾北部まで到達するには概ね１時間程度かかるとされています。その時間は決して長くありませんが、津波警報が発表されたときは、テレビやスマートフォンなどで正確な情報を入手するとともに、葛飾区が発表する情報にも注意をお願いします。

津波の特徴

1. 海面から浅い運動の風浪とは異なり、海底までの海水の運動で、凄まじいエネルギーをもっている。
2. 水深が深いほど高速で伝播する。
3. 高さは、深い沖合では低く、浅くなる沿岸では高くなる。
4. 第１波が最大波高ではない。
5. 地形の反射屈折により繰り返し襲ってくる。
6. 河川や陸上を遡上する。
7. 押しから始まる場合と、引きからの場合がある。
8. 沖合では波長が非常に長く(数㎞～数百㎞)、目視では観測されにくい。
9. Ｖ字型の湾の奥では非常に高くなり、岬の先端でも高くなる。
10. 津波の大きさは、感じた地震の揺れに比例しない。

津波は、水深が深いほど速く伝わります。沖合ではジェット機に匹敵する速さで伝わり、水深 10 メートルでも時速 36 ㎞もあり、津波から身を守るためには、素早く逃げる、高いところに逃げる、戻らないことです。また、第１波が最大波高ではなく、繰り返し襲ってきます。

「稲むらの火」が教えてくれるのは、「津波を正しく理解し恐れ、ためらわずに行動することの大切さであり、今なお多くの人々に受け継がれています。さまざまな災害リスクについてもその知識を学び、自ら行動することの重要性を示し、防災の原点であるように感じています。

濱口梧陵はその後も人命の救助だけでなく、私財を投じて堤防を築き、地域の復興と防災に尽力しています。また「住民百世の安堵を図れ」という言葉も残しています。百年先、そのまた先の世代の安全を願うこの言葉には、防災の原点が込められているように思います。防災に携わる一人として、先人達が残してくれた教訓を学びながら、地域の安心・安全のために何ができるかを考え、この思いを改めて心に刻みたいと思います。

「稲むらの火」についての参考ページです

○ 内閣府防災担当　「稲むらの火と人津波対策」
https://www.tokeikyou.or.jp/bousai/inamura-top_j.htm

○ 気象庁　「稲むらの火」
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/tsunami/inamura/p1.html

問い合わせ先　危機管理課計画係　電話 ２２７２

令和８年１０月２８日
危機管理課発行